回族の葬送儀礼から見る人々のつながり
―中国・西安市の化覚巷清真大寺における葬送儀礼を事例として―

今中　崇文

総合研究大学院大学　文化科学研究科　地域文化学専攻

本論文は、中国西北部の陝西省西安市にある化覚巷清真大寺で営まれた回族男性の葬送儀礼を事例として、その過程を詳細に記述するとともに、そこに参列する人々が故人とのどのようなつながりにもとづいて参列しているかを分析する。

イスラームを信仰する少数民族である回族は、漢語を話し、容貌も漢族に相似しておりながら、その教義に則った食規制や日々の儀礼実践などといった生活上の便宜から、清真寺と呼ばれる宗教施設を中心に相互に独立したコミュニティを形成していることで知られている。とくに都市の回族コミュニティをめぐっては、都市部の再開発にともなう再編や消失といった大きな変化が指摘されている中で、西安回族は伝統的な姿を保持しているとされてきた。

西安回族の葬送儀礼については、故人が息を引き取って、その遺体が自宅から清真寺に運び込まれるまでの過程から、死者の姻戚関係が重要な役割を果たしているとされてきた。しかしながら本事例においては、清真寺内で営まれた宗教儀礼の観察から、故人が発起人となって結成された宗教活動に熱心な信徒グループが、故人と親しい関係にあった宗教職能者の指導のもと、葬送儀礼の様々な場面に関わっていることが明らかになった。一方で、彼らは同じ清真寺に所属するどの死者の葬送儀礼にも積極的に関与しているわけではなく、関係性の濃淡によって区別していることが分かる。

また、葬送儀礼だけに限らず、日常の礼拝などにおいて、若い信徒の姿が見られなくなってきていることも指摘される。漢族の経営する一般企業に勤めると、イスラームについての理解が得られず、礼拝にやって来る時間を確保することができないというのがその理由である。そのような状況に対する年配の信徒の批判も多々聞かれるが、若いうちは仕事を優先してお金を稼ぎ、老後を送るために十分な蓄えを得ることができたら早めに引退して信仰に専念するという新しいライフスタイルの萌芽も見られる。

さらに、本事例の葬送儀礼に参列していた人々のほとんどが同じ清真大寺に所属する回族であったが、他に観察する機会のあった葬送儀礼においては、死者の親族関係にもとづいて他の清真寺にも案内が通知され、自らの所属する清真寺で礼拝を行ってから葬送儀礼に駆けつけるなど、ひとつの清真寺で完結するものではないことが指摘できる。

キーワード：回族、清真寺、葬送儀礼、人々のつながり

1. はじめに
2. 西安回族と化覚巷清真大寺
2.1 古都西安と回族
2.2 化覚巷清真大寺
2.3 清真大寺の讃聖団
3. 清真大寺の葬送儀礼
3.1 臨終の前後
3.2 遺体を洗い浄める
3.3 ジャナーザ礼拝
3.4 埋葬する
4. 葬送儀礼に参列する人々
4.1 清真大寺におけるつながり
4.2 他の清真寺とのつながり
5. まとめとして

1. はじめに

近年、目覚ましい経済発展を遂げている中国において、都市部の再開発にともない、伝統的な地域コミュニティの再編が進行している。このような変化は、人口の圧倒的多数を占める漢族だけでなく、同じく都市に住む少数民族にも影響を及ぼしていると考えられる。

中国には2,000万人とも言われるイスラームを信仰する少数民族がいるが[1)]、その中でも最多の人口を数える回族（約980万人）は、漢語を話し、容貌も漢族に相似しておりながら、その教義に則った食規制や日々の儀礼実践などといった生活上の便宜から、「清真寺（Qīngzhēnsì）」と呼ばれる宗教施設（モスク）を中心にコミュニティを形成していることで知られる。

1943年から44年にかけて内モンゴルの回民社会を対象として調査を行った岩村忍は、回民は清真寺、宗務者、教胞という3つの要素から構成される社会集団に属していることを明らかにし、地縁や血縁的要素の見られない、その社会・宗教的な結合紐帯を「清真寺的結合」と名付けた。また、イスラームの教義によって礼拝の義務を課せられている回民は清真寺を中心に礼拝の時刻を告げる音が聞こえる範囲内に居住していること、集団の人口が増加して限界点―岩村は2、300戸としている―に達すると新たに別の清真寺を建てて分裂すること、それぞれの集団は相互に独立していることなどを指摘している［岩村1949・1950］。

このような社会集団は「教坊（Jiàofāng）」や「寺坊（Sìfāng）」、もしくは「集団」を意味するアラビア語をそのまま音訳して「哲瑪堤（Zhémǎtí、ジャマーアティ）」などと呼ばれているが、回族に独特なコミュニティの形態であり、その独自性を保つことができた要因であるとされてきた［馬宗保1994］。また、これまでの研究から現在の回族コミュニティは、清真寺に帰属意識を持つ一般信徒とその代表者によって組織される「清真寺民主管理委員会（Qīngzhēnsì mínzhǔ guǎnlǐwěiyuánhuì）」と、彼らによって外部から招聘されてくる宗教指導者「阿訇（āhóng、アホン）」、その後継者として養成される寄宿学生「満拉（Mǎnlā、マンラー）」といった人々によって構成されていることが明らかになっている［澤井2002a］。

しかしながら早くも1990年代には、都市再開発によって漢族との混住が進行し、都市インフラの整備にともなって礼拝前の浄めのために清真寺の温水施設を利用する必要がなくなるなど、清真寺の役割が低下した結果、回族の人々の散居化が進行しているという指摘がなされていた［高橋1998］。さらにここ数年、江蘇省南京市や広東省広州といった経済発展著しい沿海部の諸都市をフィールドとした、再編したり、消失したりしている回族コミュニティについての研究が盛んになってきている［cf.白2005、馬強2006a］。

都市回族コミュニティの人類学的研究につい

てのレビューをまとめた馬強は、漢族や非ムスリムのコミュニティと比較して、清真寺を中心とした同心円状の回族コミュニティは、国家の行政区画にとらわれない、文化の伝承や教育を実施する、文化的同化に抵抗する空間であると位置づけている。その一方で、多くの都市においては、すでに「脱領域化したコミュニティ」と化していることも指摘している［馬強2006b］。

このように大きな変化の中にあるとされる都市の回族コミュニティであるが、流動化が激しいかどうかにかかわらず、そこに所属する一般信徒がどのような範囲で交流しており、どのようなつながりの中で生活しているかといった研究は十分に行われているとは言いがたい。とくに清真寺で営まれる年中行事や人生儀礼において、その概要や過程についての記述はあるが、実際にだれがどのように参加しているかについてはほとんど言及されていない。

回族にとって重要な人生儀礼のひとつである葬送儀礼については、澤井充生による寧夏回族自治区銀川市の南関清真寺で営まれたものを事例とした、その過程と意味世界についての詳細な分析があるが、澤井自身も指摘しているように、そこにどのような人々が参列し、どのような役割を果たしているかといった問題については論じられていない［澤井2002b］。また本稿で事例とする陝西省西安市の回族の葬送儀礼については、地元回族である李健彪や馬健君によりその概略が紹介されているが、その参列者についての説明はほとんどなされていない［李2004、馬健君2008］。とくに馬健君は、後述するように、故人が息を引き取り、その遺体が自宅から清真寺に運び込まれるまでを詳細に説明し、その過程には故人の姻族の参与が求められることから、西安回族は伝統的に、とくに葬送儀礼においては姻戚関係を重視していると説く［馬健君2008: 110–111］。しかし、遺体が清真寺に移動してから実施される葬送儀礼にどのような人々が参列しているかについての記述はない。様々な人生儀礼の中でも葬送儀礼には生前の死者と交流のあったさまざまな人間が参列し、日常的な交流の範囲や関係が明らかになると考えるため、本稿では清真寺で営まれる葬送儀礼を主な事例として取り上げる。

筆者はこれまで、2007年10月から2008年10月にかけての1年間と、2009年8月の3週間、中国西北部の都市、陝西省西安市にある化覚巷清真大寺を中心にフィールドワークを実施した。その間、6回にわたって葬送儀礼を観察する機会を得たが、本稿ではとくに、最も詳細に観察することのできた2009年8月の事例を中心に記述を行ない、分析を進めていくこととする。

本稿においては、第一に回族の葬送儀礼についてどのような人々が参列し、どのような役割を果たしているかについて詳細に記述し民族誌的資料を提示すること、第二にはそれらの人々がどのようなつながりにもとづいて葬送儀礼に参列しているかを分析することを目的とする。

2. 西安回族と化覚巷清真大寺

2. 1　古都西安と回族

中国三大古都[2] のひとつに数えられる西安市は、陝西省の省会であり、かつて13の王朝が都を置いた都市として知られる[3]。唐の時代には「長安」と呼ばれ、人口100万人を数える当時世界最大の都市であるとともに、シルクロードを介した東西交易によってさまざまな人や物でにぎわう国際都市であった。現在、当時の面影を残すものはほとんど残っていないが、市の中心部には明代に建造された城壁や鐘楼、鼓楼といった歴史的建造物が現存している。

全長13.74kmにも及ぶ城壁に囲まれた市の中心部には、省や市の政府機関やデパートなどの商業施設が建ち並ぶ旧市街地が広がっている。現在の西安市は郊外に向かって拡大の一途をたどっており、2000年の人口センサスによると常住人口が822.52万人、登録人口が764.25万人となっている。漢族以外にも49の少数民族が居住

表 1　西安市内の清真寺

No.	名　称	所在地	教　派	創建年代
1	化覚巷清真大寺	回坊	カディーム	唐・天寶元年（742年）？
2	大学習巷清真寺		イフワーン	唐・中宗乙巳年（705年）？
3	大皮院清真寺		カディーム	明・永楽9年（1422年）
4	小皮院清真北寺		イフワーン	明・万歴39年（1611年）
5	小学習巷清真営里寺		イフワーン	清・乾隆年間（1736 ～ 1795年）
6	洒金橋清真古寺		カディーム	明代中期
7	洒金橋清真西寺		イフワーン	民国7年（1918年）
8	北広済街清真寺		カディーム	清代（1644 ～ 1912年）初
9	小学習巷清真中寺		カディーム	民国8年（1919年）
10	紅埠街清真新寺		サラフィーヤ	1988年
11	西倉清真寺		サラフィーヤ	
12	旅陝清真寺		カディーム	
13	東新街清真西寺	東新街東端南側	イフワーン	1937年
14	南城清真寺	和平門内西側	カディーム	清・康熙22年（1682年）
15	建国巷清真寺	解放路建国巷内	イフワーン	民国28年（1939年）
16	東城清真寺	長楽西路	イフワーン	1954年
17	韓森寨清真寺	韓森寨路南側	カディーム	
18	紡績城清真寺		イフワーン	1950年代
19	北関清真寺		カディーム	1940年
20	新西北清真寺	阿房北路東側	カディーム	

［李2004、馬健君2008を参照］

しているが、その人口はわずかに8.53万人で、総人口の1.15％を占めるに過ぎない。その中で、64,261人と最も人口の多いのが回族であり、少数民族人口の75.28％に当たる。

西安市内には筆者が確認できただけで20の清真寺があるが（表1）、そのうちの15までが旧市街地に集まっている。とくに旧市街地の中心部には、わずか1.5km四方の広さではあるが、12の清真寺が密集し、3万人ともいわれる回族が居住している地域があり、地元の人々の間では「回坊（Huífāng）」や「回民街（Huímínjiē）」などと呼ばれている。

これまでの研究においては、この回坊という一大回族集住地域の存在から、西安回族は比較的伝統的な回族コミュニティの姿を保持している存在として紹介されてきた。1980年代に西安市政府が大規模な都市再開発を計画した際、回坊もその対象とされたが、清真寺の周囲に居住するという形態が失われることを恐れた地元回族の猛烈な反対により、再開発が実施されることはなかった［肖2006: 18］。しかし一方では、地元回族の経済的条件が良くなるに伴い、住居を平屋から3階建ての建物に立て替えが進んだといった変化も指摘されている［Gillette 2000］。近年、西安市政府により歴史的景観保護地区に認定され［白2005、馬強2006a］、一部ではあるものの、周囲の地域と同様に、道路に面した建築物を明清代風の外観に変えるといった観光開発が進んでいる［Imanaka 2010］。本稿で対象とする化覚巷清真大寺は、この回坊の南東端に位置している。

回坊に住む回族の多くは、自らの先祖が唐の時代に西域からやって来たアラブ商人やペルシャ商人の子孫であり、それ以来、この地に住み続けていると主張する。一方、市内の東部には中華民国期（1912–1949）に河南省からやって来た回族が集まっており、東新街清真西寺、建国巷清真寺、東城清真寺といった清真寺は彼らが建立したものである。このような、西安に古くから住む回族と河南省から移住してきた回族を

区別して「西頭回回（Xītóuhuíhuí）」、「東頭回回（Dōngtóuhuíhuí）」という呼び方がある。

また、回族は信仰上ではスンナ派、法学上はハナフィー学派に属しているとされるものの、その内部は「教派（Jiàopài）」と呼ばれるいくつかの分派に分かれていることで知られる。西安回族の間では清真寺ごとに、「老教（Lǎojiào）」と呼ばれるカディーム派と「新教（Xīnjiào）」と呼ばれるイフワーン派[4]、「三抬（Sāntái）」と呼ばれるサラフィーヤ派[5]の3つの異なる教派が存在している（表1を参照）。これら3つの教派の間では、イスラームの教義についての解釈が異なることから、日常的な交流はほとんど行われていない[6]。

2.2　化覚巷清真大寺

化覚巷清真大寺（以下、清真大寺と略す）は、市内でも最大の規模を誇るカディーム派の清真寺であり、その創建は唐・天宝元年（742年）とも伝えられる[7]。西安市内で唯一観光地として開放されている清真寺であり、連日、国内外の観光客でにぎわっている。

清真大寺の境内は、東から第一進院、第二進院、第三進院、第四進院に分かれており、第二進院には信徒を対象とした宗教教育が実施される教室と礼拝前の沐浴を行う沐浴室が、第三進院には年中行事の際に提供する料理を作る厨房やアホンの控室、さらには観光客用のトイレといった施設が設けられている。第四進院の奥には礼拝大殿が東を向いて建っており、その前には月台と呼ばれる広場が広がっている。礼拝大殿の入り口前には、非ムスリムが進入することができないように、木製の柵が設けられている。

清真大寺の礼拝大殿では同時に1,000人以上が礼拝できるとされ、床には絨毯が敷かれている。礼拝大殿内は大小2つの空間に分かれているが、西側の小さな空間の壁には石で作られた窪み―「凸壁（Tūbì、ミフラーブ）」―があり、マッカの方角を示している。手前の大きな空間には、「呼図拝楼（Hūtúbáilóu、ミンバル）」と呼ばれる階段が付いた木製の台があり、金曜礼拝の際にはアホンが台の上に登ってアラビア語で朗誦を行う。これを「呼図拝（Hūtúbái、フトバ）」という。

清真大寺を訪れる観光客は第一進院の北側に設けられた大門から入場するようになっているが、信徒の多くは第三進院の北側にある通用門から出入している。この通用門は礼拝の時間以外には閉じられていることが多い。その他にも第二進院の北側に門があるが、普段は閉ざされており、本稿で取り上げる葬送儀礼や金曜礼拝、さらには年中行事といった場合にのみ開けられる。

これらの施設を管理しているのは「寺師傅（Sìshīfu）」として清真大寺に雇用されている信徒たちであり、それぞれに沐浴用のお湯を沸かすボイラーの管理や庭木の手入れ、入場券の販

写真１　清真大寺の礼拝大殿

写真２　礼拝大殿内の様子

売、門番、警備などの役割が定められている。2009年には、海外からの観光客に対応するべく、市内の外国語大学を卒業した2～3名の若い信徒をガイドとして雇用するようになった。

寺師傅の給与や施設の修繕費、光熱費などは、おもに観光客の支払う入場料によってまかなわれている。それ以外の収入としては、信徒たちからの喜捨をはじめ、清真大寺の所有する集合住宅[8]に入居している住民が支払う家賃などがある。これらの資産は、信徒から選出された代表によって構成される「西安清真大寺民主管理委員会（Xī'ānqīngzhēndàsì mínzhǔ gu ǎnlǐ wěiyuánhuì、以下、民主管理委員会と略す）」によって管理されている。2008年5月に発足した第5期民主管理委員会は、主任（1名）と副主任（3名）、委員（5名）により構成されており[9]、清真大寺の位置する区（蓮湖区）の民族宗教事務局の承認を受けている[10]。

清真大寺に所属する信徒は「坊民（Fāngmín）」と呼ばれ、正確な統計などはないものの、その数は800～1,000戸に及ぶとされ[11]、清真大寺のある化覚巷及び隣接する北院門街、西羊市といった地域に居住している。これらの地域に住んでいる人々は、礼拝の時間になると歩いたり自転車に乗ったりして清真大寺にやって来る[12]。

礼拝の指導や信徒へのイスラーム知識の伝達といった宗教的な事柄については、清真大寺に所属する13名のアホンが掌っている。そのうち、最年長のアホンは1931年生まれとかなりの高齢であるため、日常的な宗教活動にはほとんどかかわっていない。日々の礼拝の指導、信徒たちの結婚や葬送儀礼などには、1名のアホンを総責任者とした上で、その他の8名のアホンが週替わりで当番を勤めることによって対応している。また、10名のマンラーが在籍しており、アホンの助手としてさまざまな宗教活動の手伝いをしている。これらアホンとマンラーは、最年長のアホンを除いては[13]、いずれも回坊の出身である[14]。

清真大寺では、信徒への宗教教育の一環として、それぞれの年齢に応じて「老年班」、「婦女班」、「中年班」というクラスが設けられている[15]。とくに活動の盛んなのは老年班で、週に3回（月・水・金）、ズフル礼拝が終わってすぐの午後1時半から3時まで、第二進院にある教室でクルアーンの朗誦などを学んでいる。中年班は週に2回（月・金）、一日の礼拝が終了した午後8時から9時まで、婦女班は週に2回（火・木）、老年班と同じ時間に開催されている。老年班には常時20～25名の参加者がいるが、中年班や婦女班は4～5名しか参加していないなど参加者数に差が見られる。それぞれに特定のアホンが教授を担当しており、担当するアホンが都合により教授できない場合には、自習となったりすることがある。これら常設のクラス以外にも、夏期休暇期間中やマッカ巡礼前には特別クラスが設けられたりしている。

2.3　清真大寺の讃聖団

それ以外にも、清真大寺に特徴的なものとして、信徒の有志によって結成された「讃聖団（Zàngshèngtuán）」というグループが存在している。「讃聖（Zàngshèng）」とは、預言者ムハンマドを讃える章句を独特の節回しで朗誦するもので、本来であればアホンによって朗誦されるものであるとされる。清真大寺にはかつて、「学生会（Xuéshēnghuì）」という信徒のグループがあり、彼らによって讃聖が行われていたとされる。しかし1980年代の中ごろには活動を停止してしまっており、近年になって3名の信徒が発起人となって結成されたのが讃聖団である。発起人となった3名は、いずれも清真大寺から北に伸びる小路―「子午巷（Zǐwǔxiàng）」―の生まれで、それぞれに年齢的には少し差があるが、幼いころからよく知った仲であるという[16]。讃聖団は彼ら3名が中心となって親しい信徒たちに声をかけ、アホンにも相談しながら、2000年2月6日に発足した。

創設時のメンバーは22名で、うち2名はすでに亡くなっており、そのなかには初代団長が含ま

れている。現在、団長の座は空位となっており、発起人の1人が団長代理を務めている。創設メンバーの多くは50代から60代で、すでに退職しているか、自営業者が多い。最年少のメンバーとして、2009年当時、20歳の若者がいるが、彼は清真大寺のマンラーであるとともに、その父親もまたメンバーの1人である。

現在のメンバーについては、とくに名簿などを作っている訳ではなく、どの範囲までを正式なメンバーとするかについてははっきりとしない。後述する日常的な活動にはおおよそ20名ぐらいが参加しており、中には創設メンバーの名簿には名前の見えない人々もいる。その中には、同じ教室を使用している老人班の班長の姿も見られる。発起人の3名と同じく子午巷に自宅のある幼なじみや[17]、小学校の同級生というように、発起人との個人的な関係から参加している人が多いように見受けられる。また、礼拝の間の空いた時間にも教室に集まって話しをする姿が見られるなど、常日頃から顔を合わせている、宗教活動に熱心な人々の集まりであると言える。

讃聖団のメンバーは、毎週木曜日、夕方のマグリフ礼拝が終わってから、境内の教室に集まって30～40分ほどの練習を行う。続くイシャー礼拝の終了後、礼拝大殿でアホンたちとともに讃聖を朗誦する。これは、翌日が金曜礼拝の日であることを信徒たちに知らしめるためであるという。金曜礼拝においても、アホンたちによる『クルアーン』の朗誦の後、讃聖団による讃聖の朗誦が行われる。ほかにも、年中行事の1つである「聖紀（Shèngjì、預言者生誕祭）」の期間には、西安市内にあるカディーム派の清真寺を巡って讃聖を朗誦している[18]。また、要請があれば、信徒の結婚式や葬送儀礼にも参列している。

西安市内には、清真大寺の讃聖団以外にも、いくつかの讃聖団が存在しているという。その1つは同じ清真大寺の別の信徒たちによって結成されたもので、隣の北広済街清真寺のアホンの指導を受けて活動していたが、近年では活動を

写真３　讃聖団の練習風景

停止しているという。いま1つは、小皮院清真北寺の信徒によって2005年ごろに結成されたもので、これがあるために小皮院清真北寺の聖紀に清真大寺の讃聖団が呼ばれることはないということであった[19]。もう1つ、回坊内で結成に向けて動いているところがあるとされるが、今のところ成立したという話しは聞かれない。

では、このような清真大寺のアホンやマンラー、民主管理委員会、讃聖団といった人々が、どのように葬送儀礼に関与し、どのような役割を果たしているかについて以下に見ていきたい。

3. 清真大寺の葬送儀礼

回族は人が亡くなることを、「死」という表現を避けて、一般的に「帰真（Guīzhēn）」と表現する[20]。イスラームの葬儀は、預言者ムハンマドの言行をまとめたスンナにならって、迅速にまた簡素に執り行われるとされるが、ここ清真大寺においても故人が亡くなって3日以内に埋葬するという。一般的には、遺体は一晩自宅に安置され、翌日に清真大寺で葬送儀礼を執り行ってから、郊外にある「回民公墓（Huímíngōngmù）」へと運ばれて埋葬される。

清真大寺のアホンやマンラー、信徒たちによると、葬送儀礼には「洗（xǐ、遺体を洗い浄める）」、「穿（chuān、死装束を着せる）」、「站（zhàn、ジャナーザ礼拝を行う）」、「埋（mái、埋葬する）」という4つの要素があると説明される。これらはい

ずれも故人の遺体が自宅から清真大寺に運び込まれてから執り行われるものであるが、それ以前にも様々な行いが存在している。筆者は遺体が清真大寺に運び込まれる以前にどのような行いがあるかについては直接観察することはできていないので、以下ではアホンやマンラー、信徒たちへの質問のほかに、李健彪や馬健君といった地元回族による報告を参考に補足して記述する［李2004、馬健君2008］。

3.1　臨終の前後

2009年8月17日月曜日の夕刻近く、筆者は讃聖団の団長代理からの電話を受け、1人の男性が亡くなったことを知らされた。男性は55歳という若さであったが、ここ1年ほど体調を崩しており、自宅で休んでいたところ、急に息を引き取ったとのことであった。

故人は市内のホテルで修理工として働いていたが、数年前に早期退職して妻と長男とともに化覚巷にある自宅で暮らしていた[21]。日々、清真大寺に通って1日5回の礼拝に励むとともに、前職の経験を生かして、清真大寺の施設の修繕なども引き受けていた。2000年には発起人の1人として讃聖団を結成し、その会計を務めるだけでなく、2008年には第5期西安清真大寺民主管理委員会の委員に選出されるなど、アホンや信徒からの人望が厚い人物であったといえる。

一般的に、病人の様態が急変し、家族によって死期が近いと判断されると、まだ意識がはっきりしていて口を動かすことが出来れば病人自身が、そうでなければ家族が代わって、息を引き取るまで「清真言（Qīngzhēnyán、シャハーダ）」を唱える。さらに、自宅にアホンを招いて「討白（Tǎobái）、タウバ」を唱えてもらう家族もいるという。

病人が息を引き取ると、家族は悲しみをこらえて、死者の身体が温かいうちに両眼と口を閉じさせ、手足を伸ばし、顔をわずかに右に傾ける。これは、後に礼拝大殿前や墓穴内に遺体を安置させる際に、死者の顔がマッカの方角を向くようにするためであると考えられる。さらに新しい衣服と靴を身につけさせ、顔に白い布をかける。このとき、遺体を動かすことはタブーとされ、故人が男性であれば母親の実家の人々が、女性であれば実家の人々が駆けつけるまで待たなければならないという。このようなタブーの存在から馬健君は、西安回族は葬送儀礼においてとくに姻戚関係を重視していると指摘している［馬健君2008: 110–111］。彼らの到着を待っていっしょに、「水板（Shǔibǎn）」と呼ばれる、木製の担架に遺体を移すのである。これを「啓埋体（Qǐmaítǐ）」といい、移動させた後の遺体は頭を北に向けて安置される[22]。

李健彪は、病人が息を引き取ってから家族が迅速に行わなければならないこととして、「挖墳（wāfén、墓穴を掘る）」、「報喪（bàosāng、死亡を通知する）」、「縫“開凡”（féng“Kāifán”、カファンを縫う）」、「動手（dòngshǒu、故人の身を浄める）」の4つを挙げ、カディーム派であれば「孝帽（Hàomào、遺族のかぶる帽子）」と「喪服（Sāngfú、遺族が身に着ける衣装）」を準備することも必要であると紹介している［李2004: 145］。

清真大寺の回族は、墓穴の手配は回族集住地域内にある「少数民族殯儀館（Shǎoshùmínzú bìnyíguǎn）」[23]という行政組織に、カファンの用意は清真大寺に依頼する[24]。死亡の通知についても、家の門に「挽貼（Wǎntiē）」と呼ばれる紙を貼るとともに[25]、集住地域内に2～3人いるという「報喪人（Bàosāngrén）」という人々に依頼する。報喪人は回坊内の人々の人間関係をあらかた把握しているとされ、依頼を受けると、故人の親戚や知人の家を回って死亡を通知する。また清真大寺にも連絡が行くが、その知らせを受けた清真大寺では故人の葬儀への参加を呼びかける「喪単（Sāngdān）」が作成され、通用門にある掲示板に掲示される。

これらの手配が済むと、遺族の成人男性はすべて、その家の広さに応じて、中庭か門前に年

長者を先頭にして一列に並ぶ。これは、故人が亡くなったことを聞きつけた男性信徒たちがあいさつにやって来るのを迎えるためである。これを「太爾吉（Tàiěrjí）」といい、やって来た人々は一列に並んだ遺族たちと握手をしながら「アッ＝サラーム・アライクム（平安あれ、汝らのうえに）」、「ワ・アライクム・アッ＝サラーム（そして汝らのうえにも平安あれ）」と次々にあいさつを行っていく。

西安の回族はこの儀礼をたいへん重視しており、男性信徒が親戚や友人が亡くなったと聞くと、急いでその家へと向かい、あいさつをするという。かつては飲み物や食べ物を持参し、葬送儀礼の準備で忙しい遺族への贈り物としていたそうであるが［馬健君2008: 113］、現在ではとくにそのようなことをしておらず、みな手ぶらで駆けつけている。本事例ではないが、逆にやって来た人々に対して、遺族が白い帽子を渡している姿が確認されている。

故人が息を引き取った日の夜は、親戚や友人たちが集まり、遺体を囲んで故人の人柄や生前の思い出などを語る。これを「守埋体（Shǒu máitǐ）」というが、集まるのはいずれも男性で、若い人が中心となって朝まで続けるという。

3. 2　遺体を洗い浄める

讃聖団団長代理の勧めにより、筆者は葬送儀礼に参加するため、翌日の午前10時に清真大寺へと向かった。いつものように、信徒たちの利用する通用門から清真大寺内に入って行ったが、そこにある掲示板には、すでに本日の葬送儀礼についての喪単が掲示されていた。そこには、喪主として故人の兄[26]の名とともに、妻の実家が挙げられ、その下に故人の名前が記されていた。さらに、当日、8月18日火曜日の「响礼（Shǎnglǐ、ズフル礼拝）」後、清真大寺で「者那則（Zhěnàzé、ジャナーザ礼拝）」を執り行うので、アホンやマンラー、清真寺民主管理委員会、ハッジ、礼拝をする人々はすべて参加するよう呼びかけていた。さらには、墓地へ行く車は市政府の前から出ることと、故人の自宅の住所が記されていた。

第二進院にある教室へと向かうと、普段並べられてある椅子や机はほとんど片付けられており、担架に載せられた遺体が安置されており、その上には緑の地に金色の模様が入った布が掛けられていた。その周りには、白い布で作られた孝帽と喪服を身につけた故人の長男が立っていた。その他にも、遺族と思しき女性が声を上げて泣いていたが、その中には故人の妻の姿は見えなかった。これは、筆者が確認することのできた他の葬送儀礼でも同様であり、葬送儀礼全体を通じて故人の妻の姿を確認することができなかった[27]。

しばらくすると、讃聖団の団長代理を務める男性を先頭に、男性信徒たちが担架を担いで遺体を教室から運び出し始めた。そのほとんどが讃聖団の練習で見かけた人々である。女性たちの泣き声が響く中、担架は境内の南東角にある小さな建物へと向かい、普段は硬く扉を閉ざしている建物の中へと入っていった。故人の長男や女性たちは、遺体にすがって泣き声を上げていたが、しばらくすると建物の外へと出され、扉は硬く閉ざされてしまった。外からは中の様子をうかがうことは出来なかったが、団長代理によると、アホンが遺体を洗い浄めているとのことであった[28]。

一方、建物の前では担架を担いできた信徒た

写真 4　教室から運び出される遺体

写真５　遺体を洗い浄める部屋

写真７　転開凡

写真６　カファンに防虫剤を塗るアホン

写真８　死者に持たせる食糧を作るアホン

ちが集まって、洗い浄めた遺体を包むカファンの準備をし始めた。建物の前には「塔布（Tǎbù）」と呼ばれる木製の担架が置かれ、集まった男性信徒たちは側にある机の上から、折り畳まれた何枚かの白い布を取り出した。そのうちの最も大きい布を広げ、数人で分担して四方を持ち、1人のアホンが樟脳や竜脳香、ベニバナで作った防虫剤を刷毛で塗り付けていく。カファンに防虫剤がまんべんなく塗られると、塗った面を上にして担架の上に置かれる。

それが終わると、また別のアホンが現れ、その場にいる信徒に声をかけてカファンの載った担架を取り囲むように指示し、アホンが用意した複数の線香を、担架を一周するように手から手へと渡していった。これを「転開凡（Zhuǎnkāifán）」という。この後、カファンは遺体を洗い浄めている建物の中へと運び込まれる。さらに指示をしていたアホンは、脇に置いていた机の上で、米粒をひとつひとつ綿のようなもので包んで丸めて、死者に持たせる食糧を作成する。

遺体が洗い清められると、カファンで包まれて塔布に載せられる。ここでようやく建物の扉が開け放たれ、集まった遺族や友人たちの入室が許される。遺体の上には再び緑色の織物が掛けられているが、顔はまだカファンで覆われておらず、白い帽子をかぶっただけの状態であった。枕元には遺体を洗い清めたアホンが立ち、小さな台を設けてお香を焚いていた。室内に入った人々は、遺体の周りを反時計回りに回り、回り終わると室外へ出て行く。人の流れが一段落すると、アホンの指示により、カファンによって故人の顔が覆われ、黒地に金糸で『クルアーン』の章句が刺繍された織物が掛けられた。その後、故人の長男を先頭に友人たちが担架を担ぎ、礼拝大殿を目指して移動していく。担架をかつぐ男性たちは唸るような泣き声を上げ、集まっていた女性たちもまた泣き声を上げながら、その後ろについて歩いていった。

写真 9　遺体の回りを回る人々

写真 11　信徒たちと握手するアホン

写真 10　礼拝大殿前に運び込まれる遺体

写真 12　転経

3. 3　ジャナーザ礼拝

礼拝大殿に到着すると、遺体を載せた担架は、東面した出入り口のちょうど中央に、頭を北側に向けて安置される。担架を担いできた人々も、いったん解散し、それぞれズフル礼拝に備える。

礼拝の時間が近づくと、男性信徒たちが礼拝大殿の前面に一列に並んで、アホンたちがやって来るのを待ち受ける。午後1時近くになって、ようやくやって来たアホンたちは、最年長のアホンを先頭にして次々に信徒たちと握手をしていく。列の最後まで握手をすると、アホンたちは「都阿（Dū'ā、ドゥアー）」[29] の所作をしてから、礼拝大殿の中に入っていく。しばらくすると、アホンたちによる『クルアーン』の朗誦の声が聞こえだし、いつもどおりの礼拝が始まった。

礼拝が終わると、いつもなら我先にと帰路につく信徒たちが、礼拝大殿前に集まっていく。礼拝大殿の中から出て来た信徒だけでなく、通用門の方からやって来る人も見受けられる。最後にアホンたちが礼拝大殿から出て来ると、安置されている遺体を囲んで、信徒たちが集まり始めた。遺体の横にはスタンドマイクが用意され、アホンの1人が静かにするように呼びかける。そのアホンによる『クルアーン』の朗誦が始まると、讃聖団団長代理と寺師傅の1人が盆に載せた『クルアーン』を捧げ持ち、最年長のアホンを筆頭に、その場にいるアホンが次々と『クルアーン』を額近くまで恭しく掲げては再び盆の上に降ろしていく。これを「転経（Zhuǎnjīng）」、もしくは「転“依斯嗄替”（Zhuǎn Yīsīgātí）」といい、遺族が故人の贖罪をする行為であると説明される[30]。

『クルアーン』を朗誦していたアホンが転経を終えると、全員が西面してジャナーザ礼拝が行われる。ジャナーザ礼拝は通常の礼拝と異なり、立ったまま手を挙げ、「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」と唱える。これを全部で4度繰り返す。このとき、いつの間にか現れた

写真 13　ジャナーザ礼拝

写真 14　回民公墓へと向かうバス

女性たちは礼拝には参加せず、後ろの方でその姿を見守っていた[31]。参加している信徒たちの顔ぶれを見ると、普段はあまり姿を見せない若い信徒の姿も見受けられたが、比較的年齢層の高い人々がほとんどを占めていた。

礼拝が終わると帰路に着く人々とともに、故人の長男を先頭にして担架が運び出される。担架の周囲を取り囲んだ友人たちは、唸るような泣き声を上げて交替で担架を運ぶが、いったん担架を離れると泣き声をぴたりと止める。それを繰り返しながら、金曜礼拝や祭礼の時以外は閉じてある、教室の横にある門をくぐって清真大寺の外に出る。そのまま回族集住地域内を抜けて、移動用の車が停めてある場所を目指す。

墓地までいかない参列者に対しては、参列してくれたお礼として、「油香（Yǒuxiāng）」という小麦粉を練って平たく延ばし油で揚げた食べ物が配られる。

3. 4　埋葬する

担架に載せられた遺体は、故人の長男をはじめ数人の男性信徒とともに、バンタイプの自動車に乗せられて一足先に回民公墓を目指して出発した。信徒たちの中には自家用車に乗り合って移動するものもいるが、ほとんどの人は遺族の手配した大型バスで回民公墓に向かう。回坊内は道が狭くて大型バスが進入できないため、清真大寺から歩いて5分ほどの、道幅のある市政府前に停められるのが常である。今回の事例では4 ～ 5台の大型バスが手配されていた。

回民公墓は西安市の西郊外、臨潼区の洪慶にあり、丘陵状の斜面がすべて回族の墓地となっている。かつて回族の人々は回坊内でそれぞれに土地を購入して墓地としていたが[32]、都市の衛生条件を改善しようとする西安市政府によって1950年代になって回民公墓が整備され、市街地にある墓地をすべて移転するとともに、以後の埋葬はここで行われるようになった。西安市政府は、漢族に対しては火葬を推奨したが、イスラームを信仰する回族に対しては、その教義に基づく習慣を尊重して、この墓地内に限って土葬による埋葬を認めている。

馬健君によると、遺体を埋葬する墓穴は南北方向に伸びる長さ6尺、幅3尺、深さ7 ～ 8尺の「直庭（Zhíting）」、もしくは「正堂（Zhèngtáng）」という部分と、その西側に掘られる長さ6尺、幅3尺、入り口の高さ2尺の「偏堂（Piāntáng）」という2つの部分から構成されている［馬健君 2008: 118］。偏堂は北が高く、南が低くなっており、遺体はここから搬入される。

回民公墓まではバスで40 ～ 50分ほどかかるが、参列する人々が到着するころには墓穴はすでに掘り終えられており、遺体とともにやってきた遺族によって状態がチェックされる[33]。墓穴に問題がなければ、2 ～ 3人が先に下りて、遺体を墓穴へと降ろしていく。その際には、遺体

写真 15　墓穴に降ろされる直前の遺体

写真 16　アホンと讃聖団による讃聖

を載せた担架の下部についた6つの鉄の輪に紐をかけてゆっくりと降ろしていくが、墓穴内にいる人が受け取ると、すぐに紐を取り、担架も回収する。遺体は頭部を北に向けてゆっくりと偏堂の中に入れられ、カファンを開けて顔を露にし、マッカの方角（西）を向かせる。

偏堂の入り口をレンガで閉じると、周囲に盛ってある土を入れて墓穴を埋める。最初に故人の長男がスコップで3回土を入れると、後は集まった信徒たちが次々と土を入れていき、小さな土饅頭ができるまで土を盛っていく。土饅頭ができると、まだ葉のついている木の枝と、故人の長男によって点火された線香が刺された。

その間、墓穴の周囲では、アホンやマンラーが座り込んで『クルアーン』の朗誦が行われる。彼らには、遺族によって、「乜貼（Niètiē）」、もしくは「海貼（Hǎitiē）」と呼ばれる白い紙に包まれた喜捨が配られる[34]。これは、清真大寺から支給される給与に加えて、アホンやマンラーの重要な収入源となっている[35]。墓穴が埋められ、『クルアーン』の朗誦が一段落ついてドゥアーが行われると、多くの参列者は大型バスに乗り込んで帰路に着いていった。

墓の周囲には3名のアホンと讃聖団を中心とするわずかな信徒たちが残った。それまで、唸るような泣き声を上げながらも、決して涙は見せなかったアホンや信徒たちであったが、アホンによる『クルアーン』の朗誦が始まると、あちらこちらからすすり泣きの声が聞こえた。朗誦をしているアホンも、しばしば涙で声を詰まらせていた。『クルアーン』の朗誦が終わると讃聖が行われ、最後は「アッ＝サラーム・アライクム」の声で締めくくられた。

最後まで残っていたバスに乗り、化覚巷まで戻ると、故人の自宅前にあたる路地で食事が振る舞われていた。路地には机が並べられており、席に着くと、すぐに料理が運ばれて来る。4～8名ぐらいが座ることのできる正方形の机が10席ほど設けられている。席についているのはほとんど男性であったが、一角には女性たちが集まっている席もあった。料理を運んでいる人の中には、マンラーのほかに、寺師傅の姿が見られた。葬送儀礼後の会食で出される料理として代表的なものに、細かく切った羊肉を入れて炊いたお米のお粥、「油飯（Yóufàn）」がある。多くの場合、この油飯とともに、4～5品のおかずが出される。また、このときに用いられる机や食器などはすべて、清真大寺から貸し出される。食事を終えた人は、席を離れて、それぞれに帰路へとついていった。近年では、レストランを借りて会食が行われる場合もあるというが、筆者が参加した葬送儀礼で一度だけ、回民公墓からの帰りの車中で回坊内のレストランの食事券が配布されるだけで、参列者が集まっての会食は開かれなかったことがあった。

これで埋葬の当日に行われる葬送儀礼は終了

となるが、遺体を埋葬してから数えて3日目、5日目、7日目、1ヶ月、40日目、100日目、1年といった日を節目にして、「平安乜貼（Píng'ān niètiē）」という故人を偲ぶ行事が行われる。清真大寺の掲示板に「請柬（Qǐngjiǎn）」という案内状を掲示して自宅に故人の友人たちを招き、アホンに『クルアーン』を朗誦してもらう。讃聖団を招待した場合には讃聖も行われ、すべての儀礼が終わると食事が振る舞われる。

4. 葬送儀礼に参列する人々

イスラームの教義によると、同じムスリムの葬送儀礼を営むこと、とくにジャナーザ礼拝に参加することは集団的義務とされる。本事例においても、ズフル礼拝を終えた信徒はほぼすべて、そのままジャナーザ礼拝に参列していた。ジャナーザ礼拝に参加していた男性は、全員が白い帽子を被っており、いずれもイスラームを信仰するムスリムであることが伺える。

葬送儀礼が営まれている間、筆者の確認することができた限りでは、清真大寺において白い帽子を被っていなかったのは偶然その場に居合わせた観光客だけであった。故人は生前西安市内のホテルで働いていたことがあり、職場には漢族などの非ムスリムがいたと考えられるが、この葬送儀礼だけでなく、日常的に回族以外の人物と交流している姿を確認することはできていない。

清真大寺は西安市で唯一の対外開放されている清真寺であり、市内最大規模の清真寺であるため、同じくムスリムにとって参加が義務とされている金曜礼拝では、他地域から西安市に来ている回族や、ウイグル族などの他の少数民族、市内の大学に留学しているムスリム留学生といった普段見かけない人々も礼拝に参加している。一度、金曜礼拝の後に営まれた葬送儀礼を観察する機会を得たが、それらの人々は礼拝が終わると早々に帰路についてしまい、ジャナーザ礼拝に参列する姿を見ることはできなかった。そのため、清真大寺で営まれる葬送儀礼に参加しているのは、基本的に現地の回族であるといえる。

それでは、現地の回族からなる参列者が故人とどのようなつながりがにあるかについて、以下に分析していきたい。

4.1 清真大寺におけるつながり

本事例で対象となった故人は化覚巷の生まれで、妻もまた化覚巷の出身である。そのため参列者の顔ぶれは、他の清真寺のアホンなどの姿も見えず、日常的に清真大寺で顔を合わせている人々で占められていた。

先に挙げたように、西安回族の葬送儀礼については、とくに姻戚関係が重視されているという指摘がある。しかし清真大寺の中で営まれた葬送儀礼においては、故人と姻戚関係にある人物が重要な役割を果たしている場面は見られなかった。それに代わって、儀礼を営むにあたって重要な役割を果たしていたのは、故人と日常的に親しくしていたアホン及び讃聖団のメンバーであった。

清真大寺では8名のアホンによる週替わりの当番制で信徒の結婚や葬送の儀礼に対応していると紹介したが、実際のところは週の当番に関係なく、日常的に付き合いのあるアホンに葬送儀礼の担当を依頼するのが常であるという。今回の事例では、儀礼の進行を務めていたアホンはたまたま週の当番でもあったが、自宅が隣接しており、日常的に故人と親しく付き合っている人物であった。カファンの準備をしたアホンは讃聖団の指導を行っている人物であり、遺体を洗い浄めたアホンもまた日常的に故人と親しい関係にあった。

これらアホンを補佐し、葬送儀礼が円滑に進行するよう務めていたのは、いずれも故人と同じ讃聖団のメンバーである。故人の遺体が安置されていた教室には「×××〔故人の名前〕教友治喪小組（×××の葬儀実行班）」と書かれた

黄色い紙が張り出されていたが、そこに名前が挙げられた21名の内、15名までもが讃聖団の創設メンバーであり、それ以外の名前もまた讃聖団の練習でよく見かける人々のものであった。ちなみに、故人と同じ民主管理員会のメンバーとしては、1人の名前が挙がっているだけであった。

彼らは故人の遺体を載せた担架を運ぶ以外にも、礼拝大殿に集まった信徒への声掛けやスタンドマイクの準備を行っていた。このような行為は普段の宗教活動の中でもしばしば見られることである。とくに団長代理を務める男性は、清真大寺で営まれる宗教活動に通じているとともに、声がよく通ることから、宗教活動が行われるたびに進行などを行っている[36]。今回亡くなった男性もまた、宗教儀礼に際して道具やマイクの準備を行っている姿が何度も目撃されている。このような姿は「開斎節（Kāizhāijié、イード・アルフィトル）」[37]といった祭礼でも観察されている。

とはいえ、同じ清真大寺に所属している信徒の葬送儀礼であっても、すべてに讃聖団のメンバーが関与するわけではない。筆者のフィールドワーク中、清真大寺で葬送儀礼が営まれながらも、団長代理が太爾吉とジャナーザ礼拝にだけ参列して回民公墓には行かないということが何度かあった。このことについて団長代理は、ジャナーザ礼拝に参列することはムスリムとしての義務であるが、「彼とはとくに仲がいいわけではなかったから」と説明する。それに対し、自らの親戚や同じ教室を使用している老年班のメンバーの葬送儀礼には積極的に関与するなど、同じ清真大寺に所属する信徒の間であってもその人間関係の濃淡によって区別していることが分かる。このような状況について、清真大寺にはいくつかの派閥があり、特定のアホンと信徒が結びついてグループを形成しているという話も聞かれる。

一方、葬送儀礼の参列者全体にいえることであるが、比較的年齢層が高く、10代から20代の若者の姿はほとんど見られないことが指摘できる。これは普段の礼拝においてもまた同様のことが言える。故人の長男も20代の若者であり、市内にある海外ファッションブランド店で勤めているというが、本事例の葬送儀礼を除いて清真大寺内で姿を見ることはない。その理由として、漢族が経営する企業では、イスラームの教義に対しての理解が得られず、礼拝にやって来る時間を確保することができないということが語られる。これは讃聖団においても同様の傾向が見られ、30代と見られるメンバーも在籍しているが、金曜礼拝や葬送儀礼ぐらいでしか姿を見ることができない。先述のように最年少のメンバーとして20歳の若者がいるが、その父親もまた讃聖団のメンバーであり、本人もマンラーとして本事例の進行を務めていたアホンに師事するなど例外的な事例であると考えられる。

このような状況について、年配の信徒からは批判的な話を聞くことも多いが、讃聖団のメンバーからは社会の変化によるものであるため仕方がないという意見が聞かれた。故人は晩年に早期退職をして信仰を中心とする生活を送ることを選び、発起人となって讃聖団のような信徒の有志グループを結成した。同じく発起人の一人である讃聖団団長代理もまた、その語学力を生かして西安市内や上海などの観光地で日本人相手の販売員として働きながらも、余生を過ごすのに十分なお金をできるだけ早く稼いで引退し、すべてを信仰に捧げる生活をしたいと常々語っている。このような、若い時には仕事のために清真寺を離れていても、引退してから信仰を中心とした生活を送るために清真寺に戻るというのが、今後の新たなスタイルとなっていくのかもしれない。

本事例では参列者の範囲は概ね清真大寺に所属する信徒だけで占められているようであったが、他の清真寺所属する信徒が参列することはないのであろうか。もしあるとするのであれば、それはどのようなつながりから参列するのであ

ろうか。このような問題について、以下に検討してみたい。

4.2　他の清真寺とのつながり

本事例の葬送儀礼は月曜日に営まれているが、ジャナーザ礼拝の前に行われたズフル礼拝には、普段の礼拝よりも多くの人々が参加していた。さらにジャナーザ礼拝には、ズフル礼拝には間に合わなかったと考えられる人々も駆けつけてきており数百名にも及ぶ人々が参列している。これは、故人は比較的若くして亡くなったものの、民主管理委員会の委員を勤めるなど人望の厚い人物であったことが影響している。参列していた信徒たちの話によると、死者が高名なアホンであったりする場合にはより多くの人々が参列し、その中には他の清真寺のアホンなどの姿も見られるとされる。

2008年6月18日水曜日、清真大寺から正式に承認されてはいないものの、イスラームの知識が豊かで人望があることから、アホンと呼ばれていた人物の葬送儀礼が営まれたが、ジャナーザ礼拝の際には礼拝大殿前の月台が埋まるほどの人々が集まった。その中には、回坊にある他の清真寺のアホンだけでなく、遠く離れた西郊外にある新西北清真寺のアホンも、自分の所属する清真寺でのズフル礼拝を終えてから参列していた。このときには、あまりの参列者の多さからか、回民公墓から戻ってきての会食も清真大寺の境内に机を並べて振る舞っていたほどであった。

ちなみに、このとき参列していたのはすべて、清真大寺と同じカディーム派の清真寺に所属しているアホンであり、教派の異なるイフワーン派やサラフィーヤ派のアホンが参列することはほとんどないとされる。

このような別の清真寺からの参列者もまた、報喪人や喪単による通知を通じて清真大寺にやって来ていると考えられる。それは清真大寺の通用門にある掲示板には、清真大寺に所属する信徒のものだけでなく、他の清真寺で営まれる葬送儀礼の喪単も貼られていることから明らかである。それらの喪単には喪主と死者の母親の実家だけでなく、欄外に手書きで「××之妹夫（××の妹婿）」、「××之岳母（××の妻の母）」のように、死者と清真大寺に所属する信徒がどのような関係にあるかが記されている。

このように西安回族、とくにカディーム派の回族の間では、あくまでも故人の所属する清真寺を単位としながらも、主に親戚関係にもとづいて、より広い範囲で葬送儀礼の通知がなされる。しかし、教派が異なるとその限りではなく、違う教派の信徒による参列というものはあまりないといえる。

5.　まとめとして

これまでの研究から回族のコミュニティは、清真寺の周囲に居住する一般信徒と、その代表者によって組織される民主管理委員会、そして彼らによって外部から招聘されてくるアホン、その後継者として養成されるマンラーによって構成されると理解されてきた。しかしながら本稿で事例とした葬送儀礼においては、アホンやマンラー以外に讃聖団という有志の信徒グループが組織され、宗教儀礼の進行にも積極的に関与していることが明らかになった。彼らは様々な年中行事にも積極的に参加してアホンを補佐しているが、すべての葬送儀礼に参列している訳ではない。その理由としては故人とのつながりの濃淡が挙げられるが、そのようなつながりにもとづく派閥の存在も指摘されている。

また、讃聖団のメンバー構成にも見られるように、葬送儀礼に参列していた人々の年齢層は比較的高く、若者の姿はほとんど見られない。これは清真大寺における普段の礼拝や年中行事においても同じような状況が見られる。その背景には、仕事を引退してから信仰を中心とした生活を送るという新たなライフスタイルの萌芽が見られる。他地域の回族コミュニティに比べ

て、伝統的な回族コミュニティの姿を維持ししているとされてきた西安回族であるが、これは大きな変化であると言えるだろう。

さらに、本事例ではあまり確認することができなかったが、葬送儀礼に参列する人々の範囲は決してひとつの清真寺に限らない。葬送儀礼の案内状から、その範囲を決定する要因のひとつに、死者の親戚関係があることは明らかである。しかし、そのような関係にあるのは、ほとんどが同じ教派の信徒同士であると言える。

一方で、このような現状に対しては、市内の大学に通う回族の若者などを中心に「清真寺はすべてのムスリムのためにあるべきものなのに、一部の年寄りたちが独占している」という不満も聞かれる。このような意見が出てくる背景と、彼ら若い世代が理想とする信仰生活とはどのようなものかについては、今後の調査と研究の課題としたい。

注

1）イスラームを信仰する少数民族として、回族、ウイグル族、カザフ族、トンシャン族、キルギス族、サラール族、タジク族、ウズベク族、ボウナン族、タタール族がいる。

2）中国三大古都としては、西安のほかに、北京と洛陽が挙げられる。

3）西安に都を置いた王朝としては、西周（前1050～前770年）、秦（前383～前350年）、前漢（前206～8年）、新（9～23年）、後漢（190～195年）、西晋（313～316年）、前趙（319～329年）、前秦（351～385年）、後秦（386～417年）、西魏（534～557年）、北周（557～581年）、隋（581～618年）、唐（618～690年、705～904年）が挙げられる。

4）西安の回族社会にイフワーン派が伝播したのは1916年ごろのこととされる。詳しくは馬靖夷や馬斌の研究を参照のこと［馬靖夷1988、馬斌1998・2001］。

5）西安へのサラフィーヤ派の伝播時期については、李健彪が1940年代後半とするのに対し［李2004: 98–99］、馬健君は1950年代であるとしている［馬健君2008: 215］。

6）カディーム派の回族からは、アホンへの喜捨などをイスラームの教義に適わないものとするイフワーン派やサラフィーヤ派との考え方の違いから、両派との通婚を避けるような言説が聞かれた。

7）清真大寺が唐代の創建であるという説は、その境内にある『創建清真寺碑』の記述に依拠している。この碑の内容と清真大寺の創建年代をめぐっては、これまでさまざまな議論が繰り広げられてきたが、現在では北宋の創建とする説と明代の創建であるとする説が並存している［桑原1912、中田1996、呉1998］。

8）この集合住宅は「福利園（Fúlìyuán）」と呼ばれ、周囲の一般的な住宅よりも安く借りることができるという。

9）それまでの民主管理員会は任期が3年であったが、この第5期民主管理員会から5年に変更された。ちなみにそのメンバーには、名誉主任として最年長のアホンも名を連ねている。

10）西安清真大寺民主管理委員会が成立したのは1996年5月のことで、中華人民共和国建国以前には「十二家社頭（Shíèrjiāshètóu）」と呼ばれる12名の有力信徒によって運営されていたと伝えられるが［馬希明1988: 26］、文化大革命によって清真大寺が閉鎖されるといったことがあり、その前後にどのような管理運営組織があったかについてははっきりとは分かっていない。

11）どのような資料に依拠しているかは不明であるが、楊文炯は清真大寺に所属する信徒の人数を1万人としている［楊2007: 375］。

12）回族はイスラームの教義にもとづいて1日5回の礼拝を行うが、夜明け前の礼拝（ファジュル礼拝）を「晨礼（Chénlǐ）」もしくは「榜木達（Bāngmùdá）」、正午すぎの礼拝（ズフル礼拝）を「晌礼（Shǎnglǐ）」もしくは「撇什尼（Pīeshéní）」、日没前の礼拝（アスル礼拝）を「哺礼（Bǔlǐ）」もしくは「迪蓋熱（Dìgàiěr）」、日没後の礼拝（マグリブ礼拝）を「昏礼（Hūnlǐ）」もしくは「沙目（Shāmù）」、夜の礼拝（イシャー礼拝）を「宵礼（Xiāolǐ）」もしくは「虎夫達（hǔfūdá）」と呼ぶ。

13）最年長のアホンは本籍が陝西省南部の漢中市で、父親がかつて南城清真寺のアホンを勤めていたときに生まれた。

14）アホンとマンラーは、いずれも回族集住地域内に自宅があり、毎日徒歩や自転車で清真大寺に通っている。

15）そのほかにも「少年班」と呼ばれるクラスがあり、学校の長期休暇中（夏期休暇と春節休暇）に子どもたちを集めて宗教教育が行われている。

しかし、参加している子どもたちが特定のアホンの親戚に偏っていることから、そのアホンの個人的なものと考え、清真大寺による宗教教育のクラスとしては取り上げない。

16）発起人の3名は、後に団長代理を務める男性が1965年生まれ、本稿で事例として取り上げる故人が1954年生まれ、残る1名が1957年生まれである。

17）讃聖団の団長代理は3人兄弟の次男であるが、兄弟がそれぞれ結婚して生家が手狭になったこともあり、回坊から歩いて5分ほどのところにあるマンションを購入して自宅としている。しかし、生家も頻繁に訪れており、昼食などはほとんど生家か近くにある妻の実家でとっている。

18）預言者ムハンマドを祝う行事である聖紀は、その誕生日であるヒジュラ歴第3月12日に催されるものであるが、西安市内のカディーム派の清真寺においては旧正月である「春節（Chūnjié）」の期間に実施されている。この期間中、それぞれの清真寺では日をずらして聖紀が実施され、互いにアホンや民主管理委員会のメンバーを招待し合うのである。

19）清真大寺の讃聖団には、転居前には小皮院清真北寺に所属していたという信徒が2人参加している。彼らは普段、清真大寺で礼拝を行い、讃聖団の練習などに参加している。しかし、小皮院清真北寺の聖紀にも参加して、当寺の讃聖団とともに讃聖を行っていた。

20）ほかにも「口喚（Kǒuhuàn）」、「毛提（Máotí）」、「無常（Wúcháng）」といった表現があるが、とくに西安回族に特有の表現として「歿了（Mole）」というものがあるという［馬健君2008: 108］。

21）他に結婚して家を出た娘が1人いるが、同じ回族集住地域内に住んでいることから、しばしば孫娘の世話を見てもらうために帰ってきている。

22）かつては、遺体の上に故人が生前好んでいた一張羅の衣服を掛け、「苫臉布（Shàliǎnbù）」と呼ばれる布を顔の上に掛けていたというが、現在は金糸で『クルアーン』の章句が刺繍された緑色の布で全身を覆うだけである［馬健君2008: 110］。

23）西安市の少数民族殯儀館は、回族集住地域の東端、東挙院巷にある。その創立は1966年の初頭で、当時の西安市副市長、海涛氏（回族、故人）の提案によるという［韓・劉1987: 175］。現在、少数民族殯儀館には、一般の職員以外に、専任のアホンが1名在職している。

24）本事例では観察することができていないが、2008年4月4日に清真大寺で執り行われた葬送儀礼のためのカファンの製作風景を観察することができている。製作は前日の夜に行われ、アホンと男性信徒が2人で携わっていた。男性信徒はマッカ巡礼を果たしたことがあるほどの熱心な信徒で、独学でアラビア語を勉強しており、簡単な会話であればできるというレベルであった。製作は30分ほどで終了したが、さらに翌日の午前11時前に虫除けのために煙で燻すとのことであった。

25）挽貼には「恕報不周（shubaobuzhou、連絡不行き届きをご寛恕ください）」、「謹阻喪礼（Jinzusangli、喪礼は謹んでお断りします）」などといった文句が書かれ、故人が男性であれば門の左側、女性であれば右側に貼るという［馬健君2008: 111–112］。

26）故人の兄は、故人の前に、第4期清真大寺民主管理委員会において主任を務めていた人物であり、その名前にはマッカ巡礼を果たしたことを示す「哈知（ハッジ）」の称号がつけられていた。

27）西安回族の葬送儀礼における故人の妻については、アホンや信徒へのインタビューでもとくに語られなかった。李健彪や馬健君も遺族の女性の役割についてはいくつか紹介しているが、故人の妻の役割についてはとくになにも記していない［李2004、馬健君2008］

28）死者が女性の場合は、「師娘（Shīniáng）」と呼ばれる、女性のアホンかイスラームの教義に通じた女性によって行われる［馬健君2008: 116］。

29）個人が自由に行う祈りで、すべてをアラビア語で行う通常の礼拝とは異なり、母国語で祈ってもよいとされる。清真大寺では「阿密乃（āmìnǎi）」のかけ声とともに肘を軽く曲げて胸の前に両手を捧げ、手のひらを上に向ける形をとる。しばらく祈ってから、アホンや年長者の声掛けにより、手のひらで顔を覆って、2～3度撫でるような動作をする。

30）馬健君は、この際にアホンやマンラーに喜捨が配られるとしているが、そのような姿は見ることが出来なかった。また、転経の儀礼自体についても、ジャナーザ礼拝の後に行われると記している［馬健君2008: 117–118］。

31）清真大寺の女性信徒が礼拝する場所は、清真大寺の外、子午巷にある3階建ての建物である。清真大寺の礼拝大殿とは有線でつながっており、アホンの説教や朗誦の声をリアルタイムで聞くことができるようになっているという。

32）回族集住地域の土地は限られているため、適当な土地を購入することが出来ない場合には、

漢族が居住する地域にも土地を求め、墓地にしていたという。

33）墓穴の周辺には、スコップや鍬を持った数名の男女がおり、遺族は彼ら／彼女らにも喜捨を渡していた。白い帽子を冠っておらず、回族の人々とは距離を取って様子をうかがっていたことから、彼らは周辺に住む漢族の農民で、少数民族殯儀館に依頼されて墓穴を掘ったものと推測される。

34）最近では、清真大寺周辺のイスラーム用品店で、喜捨を入れるための専用の袋が売られている。

35）清真大寺に所属するアホンとマンラーには、一律に、月600元の給与が支払われている。しかし、この金額に対しては一部のアホンや信徒から少なすぎるという意見がしばしば聞かれ、実際に清真大寺民主管理委員会に対して値上げを要求したアホンもいるという。

36）このような立場にある筆者の友人を、周囲の信徒たちは「調渡（Diàodù）」と呼んでいる。しかし、このような呼称は清真大寺において正式に認められたものではないということである。

37）断食明けの祭で、「聖紀（Shèngjì、預言者生誕祭）」「古爾班節（Gǔěrbānjié、イード・アル＝アドハー）」とともに、回族の三大祭礼のひとつとされる。

参考文献

白　友涛
2005　『盤根草―城市現代化背景下的回族社区』銀川：寧夏人民出版社。

岩村　忍
1949　『中国回教社会の構造　上』東京：日本評論社。
1950　『中国回教社会の構造　下』東京：日本評論社。

Gillette, M. B.
2000　Between Mecca and Beijing: Modernization and Consumption Among Urban Chinese Muslims. California: Stanford University Press.

韓　忠平・劉　英傑
1987　「西安市回民殯儀館」『西安文史資料』12（西安回族史料専輯）、pp. 175–176。

Imanaka, T.
2010　Tourism and Urban Renewal: The Case of Xi'an's "Hui Quarter". Senri Ethnological Studies, 76, pp. 193–204.

桑原隲蔵
1912　「創建清真寺碑」『芸文』3（7）、pp. 40–55。

李　建彪
2004　『三秦史話　西安回族与清真寺』（陝西旅遊歴史文化叢書）西安：三秦出版社。

馬　斌
1998　「伊斯蘭教伊赫瓦尼教派在西安地区伝播経過」『西北民族研究』1998（1）、pp. 158–159。
2001　「蕭徳珍与西安伊赫瓦尼教派」『西北民族研究』2001（1）、pp. 83–90。

馬　健君
2008　『西安回族民俗文化』西安：三秦出版社。

馬　靖夷
1988　「西安伊赫瓦尼教派的産生」『中国伊斯蘭教研究文集』《中国伊斯蘭教研究文集》編写組（編）、pp. 442–455、寧夏人民出版社。

馬　強
2006a　『流動的精神社区：人類学視野下的広州穆斯林哲瑪提研究』北京：中国社会科学出版社。
2006b　「人類学与城市回族社区研究　学術史回顧及其反思」『伊斯蘭文化研究』46、pp. 2–11。

馬　希明
1988　『西安清真大寺』西安：陝西人民美術出版社。

馬　宗保
1994　「試論回族社会的"坊"」『寧夏社会科学』1994（6）、pp. 16–22。

中田吉信
1996　「創建清真寺碑についての一考察」『就実女子大学史学論集』11、pp. 1–73。

西澤治彦
2009　「都市の再開発と回族コミュニティーの変貌―江蘇省南京市の事例から」『中国のイスラーム思想と文化』（アジア遊学129）堀池信夫（企画）、pp. 190–205、東京：勉誠出版。

澤井充生
2002a　「中国の宗教政策と回族の清真寺管理運営制度―寧夏回族自治区銀川市の事例から―」『イスラーム世界』59、pp. 23–49。
2002b　「死者をムスリムとして土葬すること―寧夏回族自治区銀川市の事例から―」『社会人類学年報』28、pp. 161–179。

高橋健太郎
1998　「回族の居住分布と清真寺の機能―中国・寧夏回族自治区、都市と農村を比較して―」『駒澤大学大学院地理学研究』26、pp. 27–43。
呉　建偉
1998　「西安化覚巷清真寺『創建清真寺碑記』箋証」『回族研究』32、pp. 2–9。
肖　紅
2006　「民族伝統文化与城市現代化―城市伝統回族社区改造発展初探」『伊斯蘭文化研究』46、pp. 15–24。
楊　文炯
2007　『互動　調適与重構：西北城市回族社区及其文化変遷研究』（西北少数民族学術研究文庫）北京：民族出版社。

ウェブサイト

『蓮湖人口網』「蓮湖区北院門街道名片」
（http://www.lhjsj.gov.cn/index/catalog246.aspx）
2009年11月17日

Human Relationships Among the Hui in Funeral Rites: The case of Xi'an Huajuexiang Qingzhendasi's funeral rites

IMANAKA, Takafumi

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies,
Department of Regional Studies

This paper, focusing on Huajuexiang Qingzhensi in Xi'an City, Shaanxi Province, China, attempts to describe the process of funeral rites held for one Hui man, and analyzes the relationships that the Hui attending the funeral have with the deceased.

The Hui were known to live in close proximity to mosques (Qingzhensi in Mandarin) which formed the heart of their communities. Recent investigations have demonstrated that Hui communities face significant changes; some of their communities have been reorganized while others have disappeared. However, the Xi'an Hui are known for preserving their traditions and customs in the face of such challenges.

Local Hui scholars argue that the family members of the deceased assume a key role in funeral rites, because they are involved in the process from when the deceased takes his last breath to the transportation of his body to the mosque. However, through my participant observation of funeral rites in Huajuexiang Qingzhensi, it was found that members of one of the mosque's volunteer groups, of which the deceased was one of the founders, were actively involved in the funeral rites under the mentorship of some religious leaders. This group is not actively involved in all funeral rite performing at this mosque, but became involved due to their particularly close relationship with the deceased. This shows that although they belong to same mosque, they may or may not be actively involved in funeral rights, depending on the context of their relationships.

In addition, not only funeral rite but also daily worship, it is rare to find young Hui in a mosque. They work in company managed by Han, who, due to a lack of understanding or consideration of Islamic customs, cannot offer sufficient time for young Hui to go to a mosque. There has been some criticism of the situation from elder Hui, however, this new lifestyle among young Hui men, in which they give priority to work when young in order to save money for their future and after amassing sufficient life savings devote themselves to religion, has become the norm.

Finally, in this case, almost every Hui who attended the funeral rite belongs to Huajuexiang Qingzhensi. However, in other funeral rites I researched, there were some Hui belonging to another mosque. After the deceased takes his last breath, another mosque may be informed through his relatives. We can often find another mosque's Hui at Huajuexiang Qingzhensi's funeral rite hot foot after worship in own mosque.

Key words: Hui, Mosque, Funeral rite, Human Relationships